

あきたからの米レター

令和4年産米 秋田県の水稲作柄 (8月15日時点)

「やや不良」の見込み

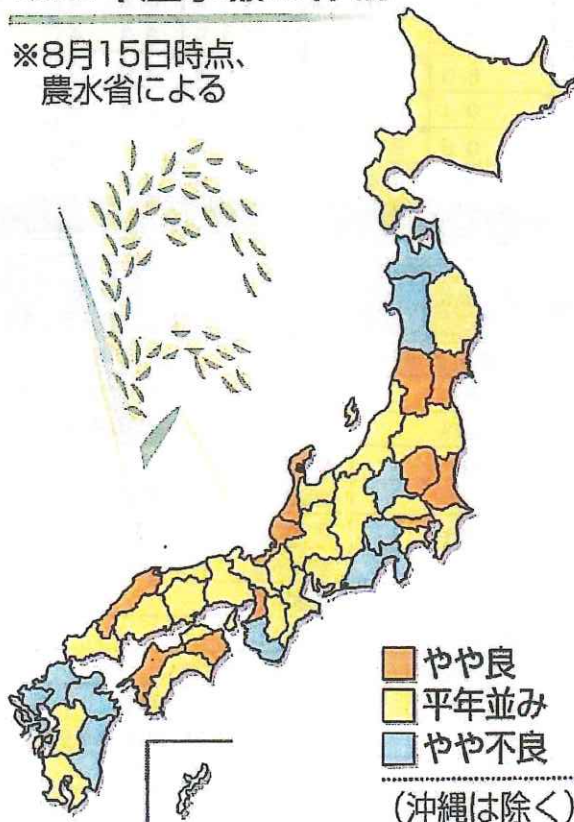
6月上旬の低温・日照不足と8月の記録的大雨が影響か

令和4年8月31日農林水産省公表

農林水産省は、8月15日現在における全国の水稲の作柄は「平年並み」が見込まれると発表した。秋田県は「やや不良」と見込まれている。同時期に「やや不良」となったのは、平成23年以来である。東北農政局秋田県拠点では、この要因は6月上旬の低温と日照不足に加えて、8月の記録的な大雨が影響したと見ている。田植の最盛期は平年より1日早い5月22日、出穂の最盛期は平年並みの8月3日であった。作柄を左右したと見られる要因は、田植え後の低温と日照不足で稲の成長が抑制され、茎数の減少につながったとみている。8月の記録的大雨に関しては、「冠水や土砂の流入などの被害は、今後の実測調査などで収量への影響を精査する」としている。今後については、「登熟の進み具合をよく観察し、刈り取り適期を見極めて高品質・良食味米の生産に当たって欲しい」と語った。

2022年産水稲の作柄

※8月15日時点、
農水省による



東北の2022年産米 水稲の作柄概況

8月15日現在



出穂8月1日、平年並みに戻る（－1日）

出穂はほ場内・株内のバラツキ大きく、初期登熟緩慢

－ 早期落水防止と適期刈り取りによる品質向上を －

令和4年8月19日 各地域振興局農林部農業振興普及課定点調査

8月19日に行った各地域振興局農林部農業振興普及課定点ほ場の「あきたこまち」の生育は、全県平均でみると、出穂は8月1日（平年差－1日）でほぼ平年並みになっている。穂数は399本/㎡（平年比88%）、1穂着粒数は82.5粒（同114%）、総粒数32.8千粒/㎡（同100%）である。穂数が少なく、1穂着粒が極端に多いことに加えて、出穂前後は雨が多く日照時間の少ない日が続いたことから、初期登熟は緩慢である。また、出穂はほ場間内、株内のバラツキが大きく、今後は早期落水防止など登熟の向上を図る水管理の励行と、品質・食味を落とさない適期刈り取りが重要となる。

農業振興普及課定点調査結果

（令和4年8月19日調査、品種：あきたこまち）

農 業 振 興 普 及 課	調 査 点 数	出穂期		穂数		着粒数			
		本年	平年差	㎡当たり		1穂当たり		㎡当たり	
		(日)	日	(本)	(%)	(粒)	(%)	(千粒)	(%)
鹿角	5	8月2日	0	414	85	78.3	117	32.4	100
北秋田	9	7月31日	0	403	86	81.2	117	32.5	100
山本	9	8月2日	0	380	84	89.2	120	33.8	101
県北	23	8月1日	0	396	85	83.7	118	33.0	100
秋田	10	7月30日	－1	380	87	88.5	119	33.6	104
由利	2	8月2日	0	391	89	83.5	116	32.5	104
中央	12	7月30日	－1	382	88	87.7	119	33.4	104
仙北	10	8月2日	0	390	86	77.3	106	30.0	92
平鹿	11	8月5日	1	409	91	80.6	107	32.9	98
雄勝	8	8月1日	－2	429	96	80.5	112	34.4	107
県南	29	8月1日	0	408	91	79.5	108	32.3	99
全 県	64	8月1日	－1	399	88	82.5	114	32.8	100

各JAの生育状況（品種：あきたこまち）

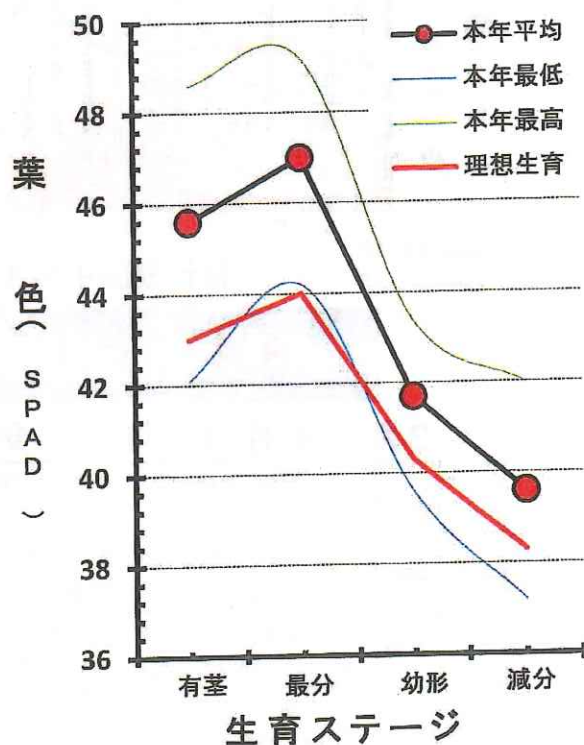
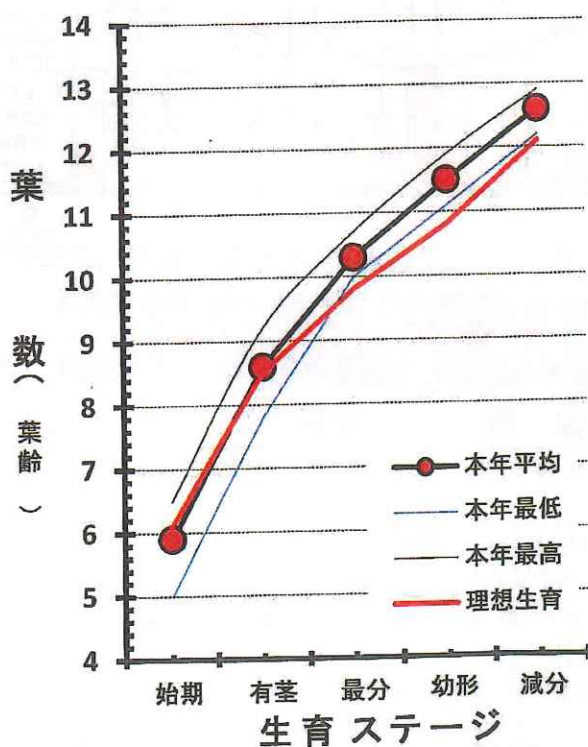
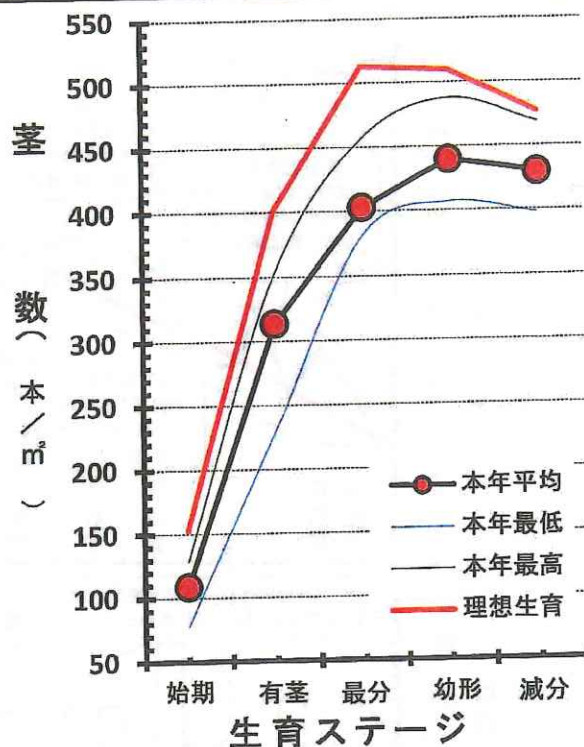
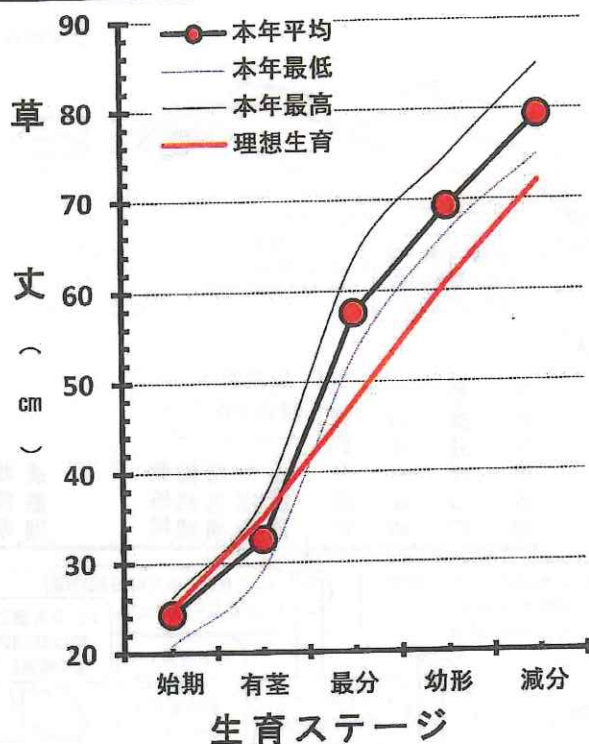
令和4年9月1日現在、聞き取り及び遠観調査

JA名	生育ステージ	生育の遅延	生育状況	病虫害の発生	特記事項
かつの	黄熟期	5日遅い	やや不良	平年並み	出穂にほ場間差大きい。カメムシやや多い。
あきた北	黄熟期	4日遅い	平年並み	平年並み	穂数やや少なく、1穂着粒数多い。
秋田たかのす	黄熟期	3日遅い	平年並み	平年並み	特になし。
あきた白神	黄熟期	平年並み	平年並み	平年並み	出穂にバラツキ、稈長が長い。
秋田やまもと	黄熟期	2日遅い	平年並み	平年並み	高温による登熟不良懸念。カメムシ多い。
あきた湖東	黄熟期	3日遅い	やや不良	多い	穂数不足、いもち病散見。
秋田なまはげ	黄熟期	1日遅い	やや不良	やや多い	穂数不足。
大潟村CE公社	黄熟期	1日早い	平年並み	少ない	特になし。
秋田しんせい	黄熟期	3～4日遅い	平年並み	やや少ない	ほ場間差が大きい。
秋田おばこ	黄熟期	7日早い	やや不良	やや少ない	穂数不足、いもち病散見。
秋田ふるさと	黄熟期	1日早い	やや不良	多い	登熟歩合低下、いもち病やや多い。
こまち	黄熟期	2日早い	平年並み	やや多い	穂数不足、いもち病散見。
うご	黄熟期	3日早い	平年並み	やや多い	いもち病やや多い。

草丈長く、莖数少なく、葉色濃く推移

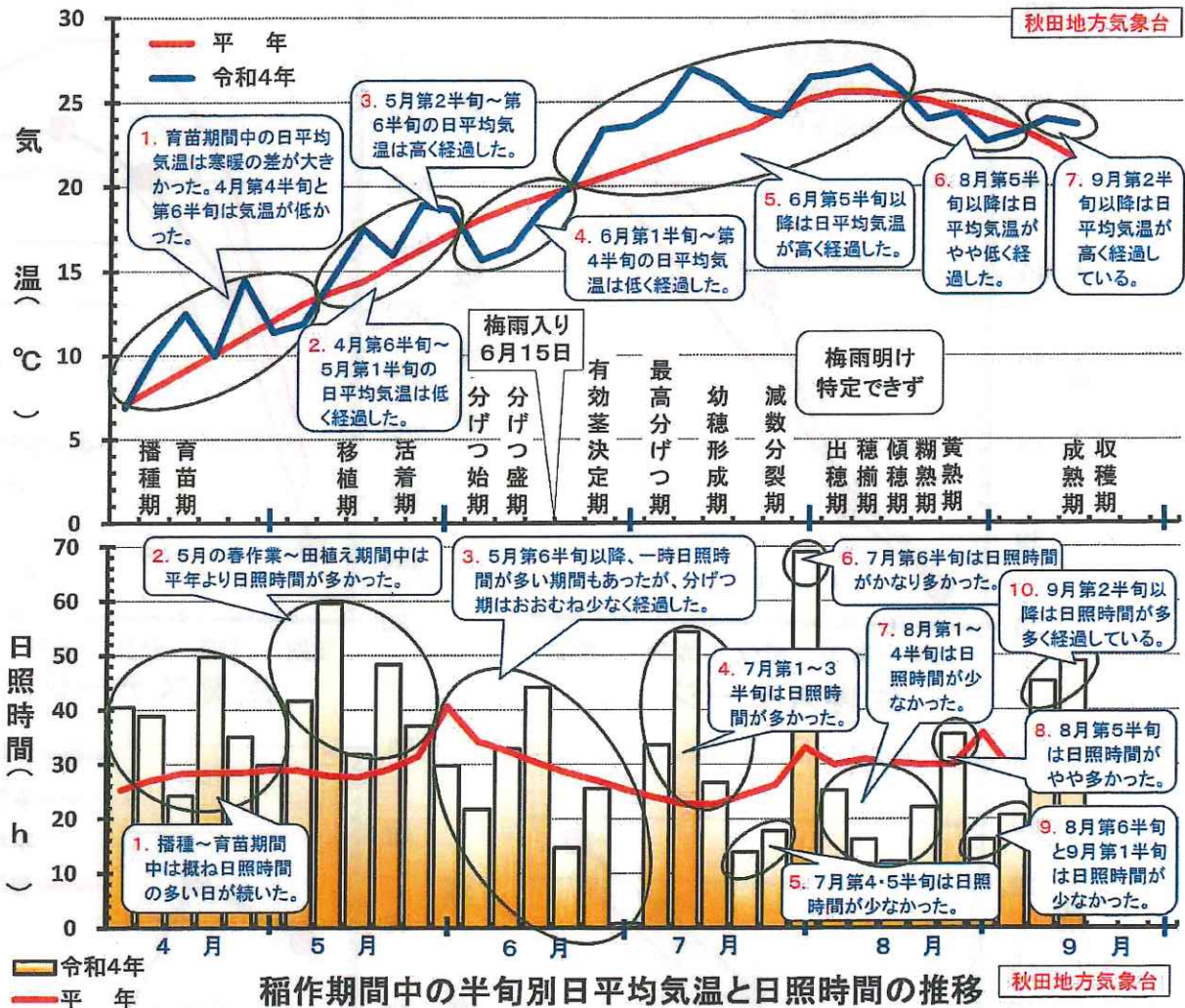
地域差・圃場間差大きく、生育・栄養診断必須

飽水・深水管理と溝掘り・中干しの実施を！



出穂前後は雨が多く日照不足

出穂はほ場内・株内のバラツキ大きく、初期登熟緩慢
早期落水防止と適期刈り取りによる品質向上を



8月・9月上旬の気象概況と統計値

8月・9月上旬の気象概況 (秋田市)

秋田地方気象台

8月	上旬	この期間、前線や湿った空気の影響により、雨や曇りの日が多かったが、一時的に高気圧に覆われて晴れた日もあった。
	中旬	この期間、前線や低気圧等の影響により雨の日が多く、暖かく湿った空気が流れ込んだことによって大気が非常に不安定になり、県の北部を中心に県内全域で大雨となった。
	下旬	この期間、高気圧に覆われて晴れた日があったが、前線や気圧の谷の影響により雨や曇りとなった日が多く、31日には前線の影響により大雨となった所があった。
9月	上旬	この期間、旬の始めから中頃にかけて、前線や湿った空気の影響により大雨となった所があった。旬の半ば以降は高気圧に覆われて晴れや曇りとなった日が多かったが、気圧の谷の影響により雨が降った所もあった。

気象統計値(秋田市)

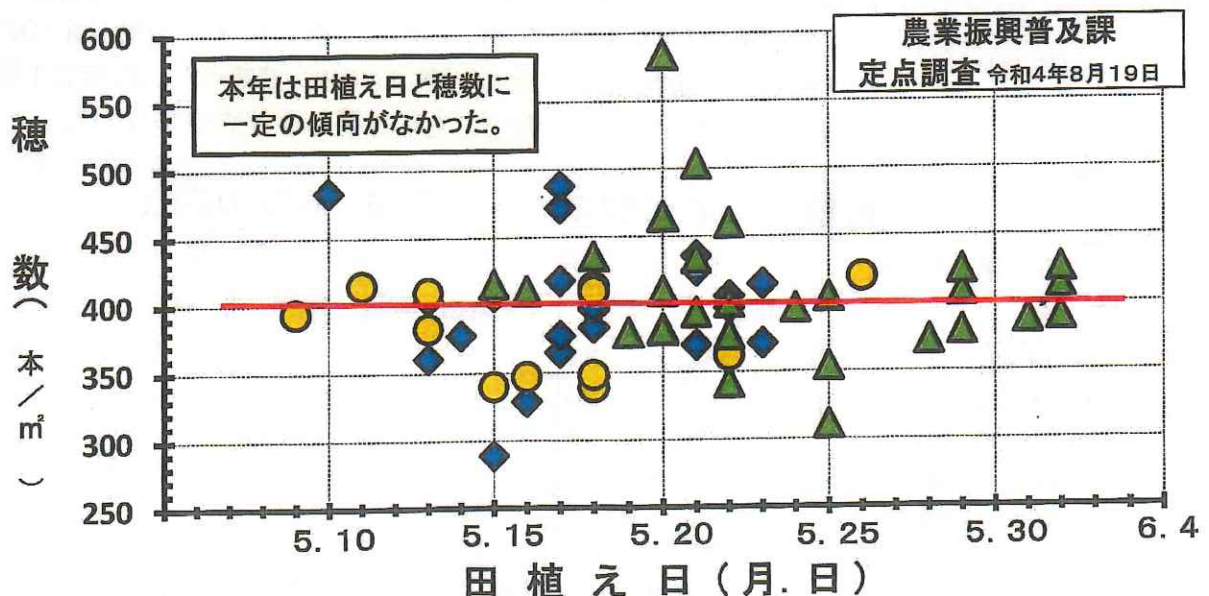
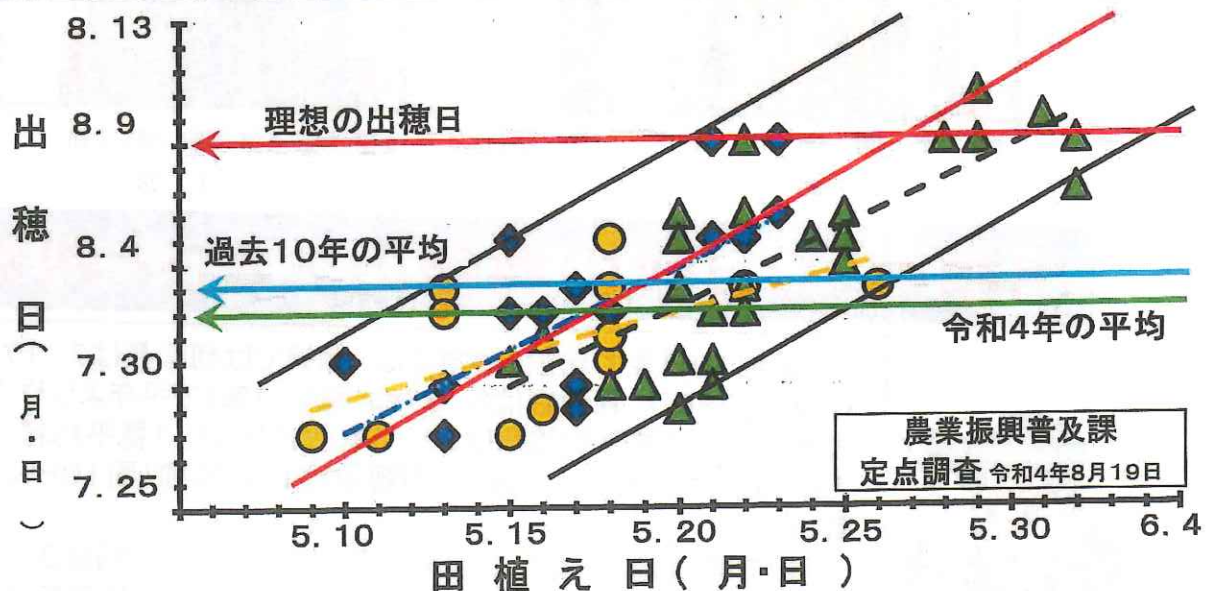
秋田地方気象台

月	旬	気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(h)		
		平均(°C)	平年差(°C)	階級区分	降水量(mm)	平年比(%)	階級区分	積算(h)	平年比(%)	階級区分
8月	上旬	25.8	+0.5	平年並み	95.0	155	多い	25.8	44	かなり少ない
	中旬	24.9	+0.4	平年並み	235.0	378	かなり多い	34.3	57	少ない
	下旬	23.5	-0.7	平年並み	38.5	51	少ない	51.7	81	少ない
	月	25.0	0.0	平年並み	334.0	181	多い	127.4	68	少ない
9月	上旬	23.6	+0.3	平年並み	64.0	124	多い	66.0	114	平年並み

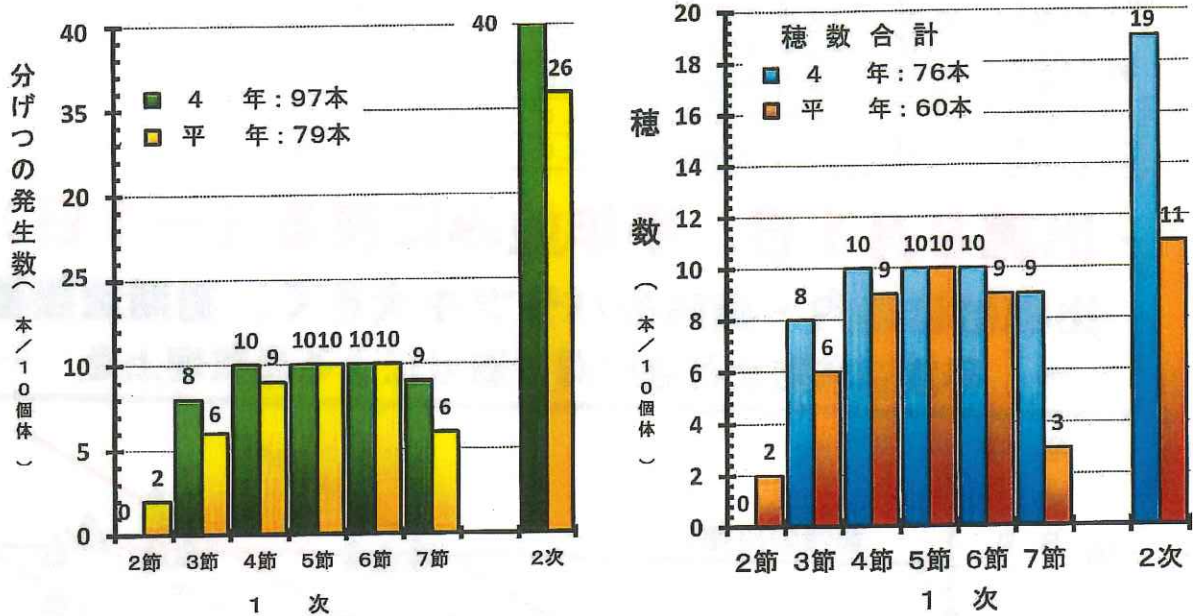
出穂8月1日、平年並みに戻る(ー1日)

出穂はほ場内・株内のバラツキ大きく、初期登熟緩

ー 早期落水防止と適期刈り取りによる品質向上を ー



有効穂の発生次位・節位



出穂期10日後の籾殻の大きさと籾数



出穂期10日後の籾殻の大きさは、標植では籾殻長は7.17mm (平年比98%)、籾殻幅は3.57mm (同104%)で平年よりやや大きかった。1株平均穂数は21.0本 (同99%)、1穂平均籾数は74.7粒 (同109%)、1株当たり籾数は1,570粒 (同108%)であった。

晩植では、籾殻長は7.04mm (平年比95%)、籾殻幅は3.50mm (同101%)で籾殻長がやや短かった。また1株平均穂数は20.5本 (同101%)だったが、1穂平均籾数は77.8粒 (同102%)、1株当たり籾数は1,594粒 (同103%)であった。本年は1穂平均籾数、1株当たり籾数がどちらも平年よりやや多かった。

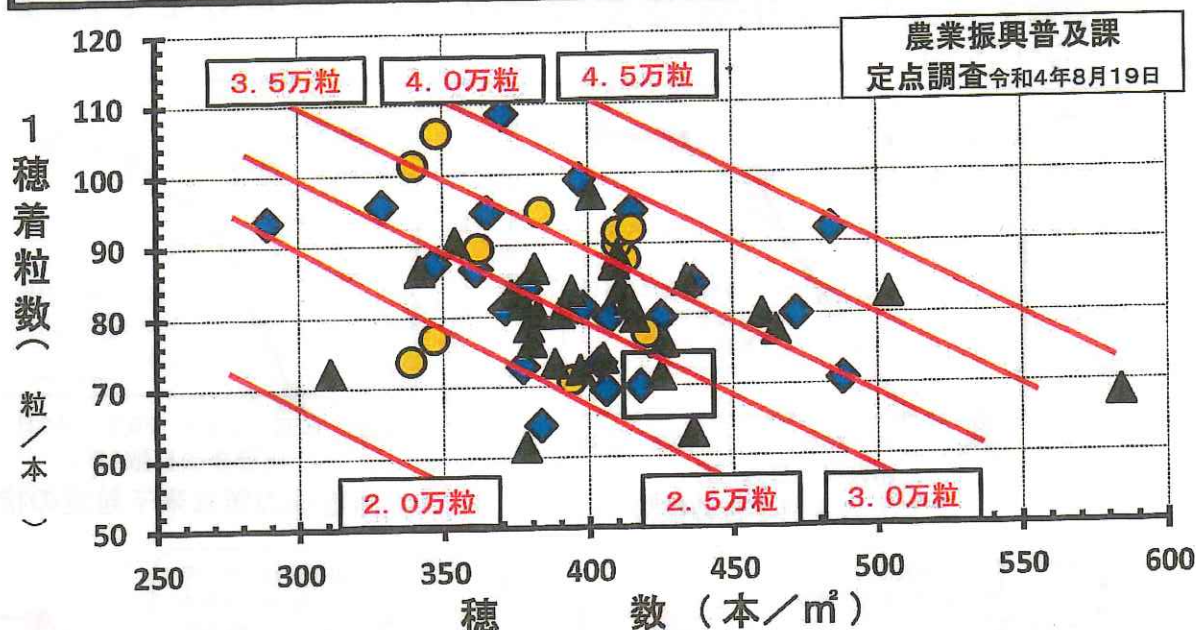
出穂10日後の籾の大きさ、穂数、籾数の調査

田植え日	標植 (5月15日)			晩植 (5月25日)		
	本年	平年	平年差・比(%)	本年	平年	平年差・比(%)
出穂期 (月/日)	7.29	7.31	-2	8.4	8.3	+1
籾殻長 (mm)	7.17	7.29	98	7.04	7.43	95
籾殻幅 (mm)	3.57	3.44	104	3.50	3.47	101
1株平均穂数	21.0	21.3	99	20.5	20.4	101
1穂平均籾数	74.7	68.5	109	77.8	76.4	102
1株当たり籾数	1,570	1,454	108	1,594	1,550	103

注: 平年は、標植; 平成12年~令和3年の平均値、晩植; 平成29年~令和3年の平均値

総粒数平年並み

穂数少なく・1穂粒数多い、地域差・圃場間差大きい
1穂粒数の多いほ場は登熟向上を図る水管理が肝要



出穂前後は「雨が多く日照不足

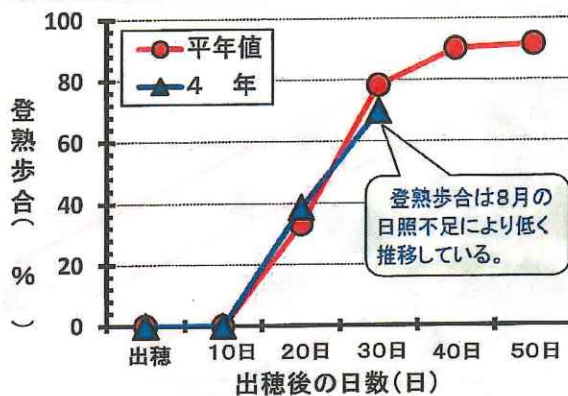
初期登熟緩慢、登熟向上の水管理と早期落水防止
籾の熟食で適期刈り取りの判断と高品質米の調製

各地域の出穂後30日間の積算気温・日照時間

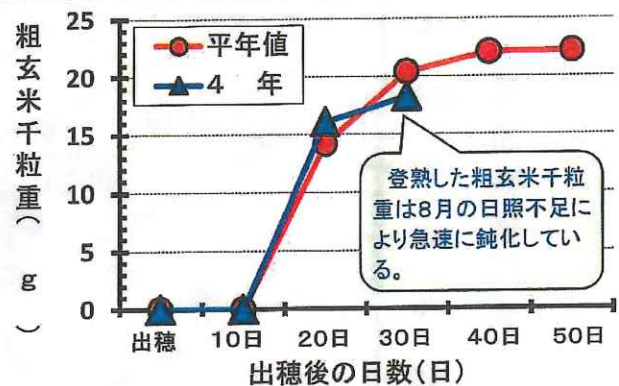
地域	出穂期(月・日)		出穂期翌日から30日間			
			積算気温(℃、%)		日照時間(h、%)	
	本年	平年差	本年	平年比	本年	平年比
鹿角	8. 2	0	662	97	114	70
鷹巣	7. 31	0	713	100	116	67
能代	8. 2	0	719	99	129	69
秋田	7. 30	-1	757	100	138	76
本荘	8. 2	0	735	100	106	55
大曲	8. 2	0	717	99	109	64
横手	8. 5	+1	719	98	89	53
湯沢	8. 1	-2	710	99	104	59

初期登熟順調も8月極度の日照不足で登熟急速に鈍化

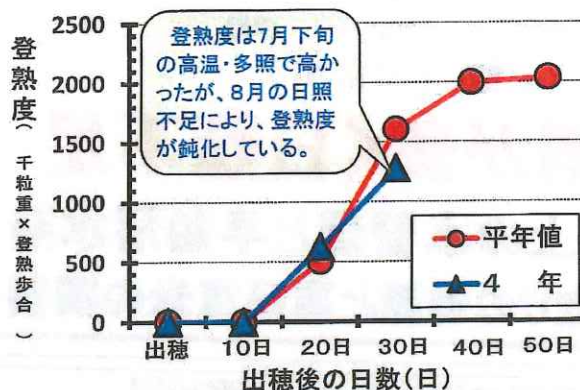
農業試験場気象応試5月15日植えの登熟状況をみると、出穂30日後の登熟歩合は70.0%(平年差-8.4ポイント)、粗玄米千粒重18.3g(平年比90%)、1株当たりの粒数が1,570粒(同108%)である。登熟中期の極度の日照不足により10a当たりの粗玄米重は543kg/10a(同92%)で平年より低くなっている。



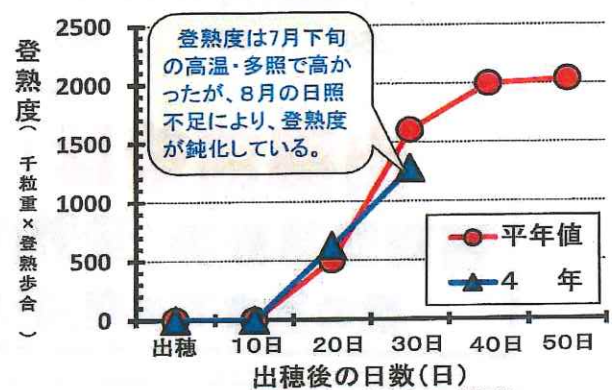
出穂後の登熟歩合の推移



出穂後の粗玄米千粒重の推移



出穂後の登熟度の推移



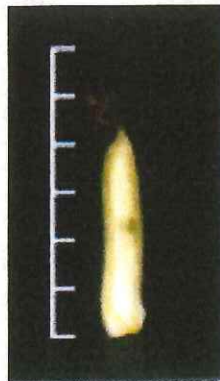
出穂後の登熟度の推移

玄米の発達過程

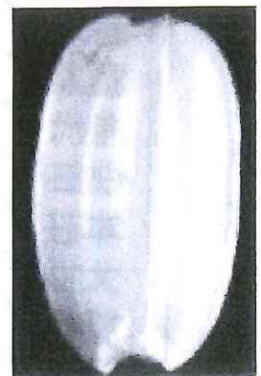
めしべ



開花・受精から45日で精玄米



玄米



9月の気温は高い確率が40% (3カ月予報)

第1・2週は気温が「平年並み」の確率50% (1カ月予報)

天気は周期的に変わり降水量はやや多く、日照時間少ない

仙台管区気象台が8月23日に発表した9月～11月までの3カ月予報では、9月は気温の高いまたは平年並みの確率がともに40%で、とくに日本海側は晴れる日と雨の日が数日の周期で変わると発表した。

また、9月8日に発表した東北日本海側の1カ月予報では、期間の第1週と第2週は気温の高い確率が60%としている。第3～4週は気温の高い確率が50%であると予想している。

東北地方の各階級の確率

仙台管区気象台

3カ月予報 8月23日発表			
3月	20	40	40
9月	20	40	40
10月	20	30	50
11月	30	30	40

1カ月予報 (9月10日～10月10日まで) 9月8日発表			
気温	10	30	60
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40
凡例	低い・少ない 平年並み 高い・多い		



9月に入ってようやく黄熟期を迎えた仙北の稲
JA秋田おぼこ千畑地区 令和4年9月8日

仙台管区気象台

1カ月予報 (9月10日～10月10日まで) 9月8日発表			
1週目	10	30	60
2週目	10	30	60
3～4週	20	30	50
凡例	低い 平年並み 高い		

8月は極度の日照不足、登熟緩慢

刈り取りは積算気温を基に稲の黄化度90%を目安に

刈り取りに向けた技術対策

- ◎ 刈り取り時期の診断 :
 - 品種別、ほ場別に刈り取り時期を正しく診断し適期刈り取りに努める。
 - 積算気温、稲の黄化程度90%など総合的に刈り取り時期を判断する。
- ◎ 倒伏ほ場の刈り取り :
 - 停滞水の速やかな排除に努める。
 - 穂発芽による品質低下が懸念される場合は速やかに収穫作業に入る。
 - 追い刈りや横刈りなどにより刈り取り精度の向上に努める。
 - 被害稲は仕分けして乾燥調製を行う。
- ◎ 高品質米生産のため :
 - 高水分稲の刈り取りは絶対避ける。
 - 稲水分の測定は、できる限りサンプル数を多くして行う。
 - 二段乾燥で過乾燥の防止に努める。
 - 網目は1.90mmで行い、整粒歩合80%以上に仕上げる。
- ◎ 農作業の事故防止 :
 - 無理のない作業計画を立てる。
 - 作業前には体調を万全に整え、作業に適した服装で作業を行う。

8月は極度の日照不足、登熟緩慢

刈り取りは積算気温を基に籾の黄化度90%を目安に

積算気温・日照時間による刈り取り時期の目安						
地域	出穂期		積算気温の到達日		日照時間の到達日	
	本年	平年差	950℃	1050℃	200h	265h
	月.日	日	月.日	月.日	月.日	月.日
鹿角	8. 2	0	9月16日	9月22日	9月21日	10月5日
北秋田	7. 31	0	9月12日	9月17日	9月18日	10月3日
山本	8. 2	0	9月12日	9月17日	9月15日	9月27日
秋田	7. 30	-1	9月7日	9月11日	9月14日	9月27日
由利	8. 2	0	9月11日	9月16日	9月20日	10月3日
仙北	8. 2	0	9月12日	9月17日	9月22日	10月7日
平鹿	8. 5	+1	9月15日	9月20日	9月28日	10月13日
雄勝	8. 1	-2	9月12日	9月17日	9月23日	10月8日

9月5日以降平年値

高品質・良食味米の米生産には

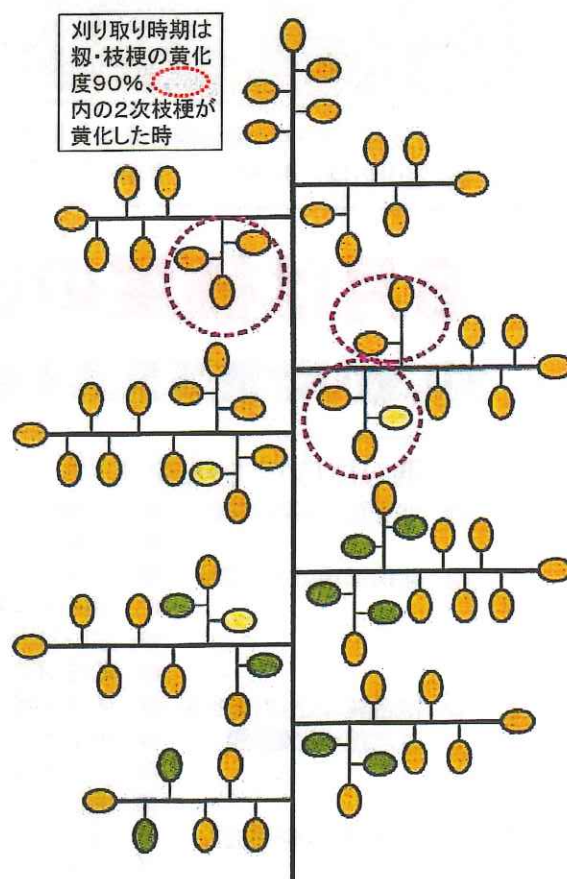
- 積算気温を基に刈り取り時期を判断！！
あきたこまちの刈り取りは、積算気温で950℃に到達してから行う。1,050℃以降の刈り取りは、品質低下となる。
- 刈り取り時期の最終判断は、籾・枝梗の黄化度90%を目安に実施する。
○ 内の2次枝梗が黄化した時点。

早刈り・遅刈りは厳禁

- 早過ぎると青米と未熟粒が多くなる。
- 遅すぎると胴割れや茶米が多くなる。

刈り取りの判定

各地域振興局農業振興普及課定点ほ場の出穂期から「あきたこまち」の刈り取り時期を推定した。出穂以降950℃及び1,050℃に達する日(9月5日以降は気温の平年値を使用)は表の通りです。出穂前後から低温・寡照で経過しており初期登熟は鈍化している。積算気温は平年並みに経過しているが、日照時間が少ないことから、籾の黄化度85～90%を目安にして刈り取ります。



令和4年 出穂期翌日からみた積算気温による刈り取り適期予想

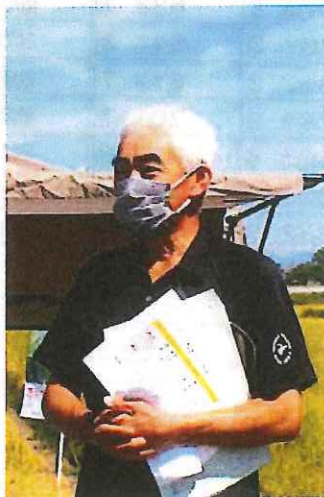
- 11 -

令和4年 第2回「サキホコレ」現地講習会開催

9月12日、令和4年から本格的に市場デビューするサキホコレの現地検討会が、JA秋田おぼこ大仙市東部営農センター管内の(農)北川目ファームほ場で開催された。栽培推奨地域の各JAサキホコレ研究会及び特別栽培米生産者、稲作営農指導員など42名が参加して行われた。

JAグループでは特別栽培米等の生産に取り組み、その栽培基準、品質・出荷基準について独自基準を設定している。また、さらなる高品質・良食味米の生産・販売をめざして、令和2年から現地試験を実施し、今年で3年目となる。

今年の稲の生育は、6月上・中旬の低温と日照不足により、茎数が少なく葉色が濃く経過した。また8月は大雨と極度の日照不足により、サキホコレの出穂は昨年と比較して7日遅く、登熟が緩慢になっている。参加した生産者と営農指導員は、適期刈り取りに向けて熱心に聞き入っていた。



あいさつ
秋田米新品種「サキホコレ」研究会
会長:佐々木竜孝



サキホコレ有機入り専用肥料試験
生産資材部肥料農薬推進課
佐藤雄太職員



今年の生育と適期刈り取り
サキホコレ施肥反応試験
米穀部参与:児玉徹



JAグループ「サキホコレ」現地検討会

JA秋田おぼこ大仙市東部営農センター管内(農)北川目ファームほ場 令和4年9月12日

「第35代ミスあきたこまち」



秋田米の魅力と生産者の想いを全国へPR



コロナウイルス感染拡大の影響により2年間活動を見送った“ミスあきたこまち”7名へ委嘱状を交付しました。
秋田米の美味しさをPRするとともに、生産者の米づくりに対する想いもあわせて伝えたいと決意表明しました。

9月は稲づくりの最終ステージである。

あきたこまちの出穂は8月1日で平年より1日早まった。幼穂形成期に予測した時よりも大幅に遅れ、ほぼ平年並みになった。6月上旬・中旬の日照不足により、草丈が短く茎数が少なく、葉色が濃く経過した。8月は各地で線状降水帯が発生し、大雨が降り続き田畑の冠水や土砂が流入し、一部水田では収穫が困難な地域が発生した。8月の降水量は各地で観測史上第一位を記録した。また気象庁は9月1日に、今年の梅雨入りと梅雨明けの確定値を発表した。速報値では多くの地方で6月下旬を梅雨明けとし、観測史上最速となっていたが、確定値では24～28日後ろへ大幅に修正して7月下旬とした。一度に多くの地方について大幅に修正されるのは異例であり、過去にはほとんどなかった。本県の速報値は7月26日の梅雨明け発表していたが、確定値は北東北を含む東北地方は時期を特定できないと修正された。こうした気象を反映し、稲はこれまで経験したことのない生育を辿っている。

農林水産省は8月31日(8月15日現在)に秋田県の作柄は「やや不良」が見込まれると発表した。同時期に「やや不良」となったのは、平成23年以来である。東北農政局秋田県拠点では、この要因は6月上旬の低温と日照不足に加えて、8月の記録的な大雨が影響したと見ている。8月の記録的な大雨の被害に関しては、「今後の実測調査などで収量への影響を精査する」としている。

また、8月19日の各地域振興局農林部農業振興普及課定点調査「あきたこまち」の結果では、全県の生育を平均でみると出穂は8月1日(平年差-1日)でほぼ平年並みになっている。穂数は399本/㎡(平年比88%)、1穂着粒数は82.5粒(同114%)、総粒数32.8千粒/㎡(同100%)である。穂数が少なく、1穂着粒が極端に多いことに加えて、出穂前後は雨が多く日照時間の少ない日が続いたことから、初期登熟は緩慢である。刈り取りについては、①田植え日から出穂日を予測しする。②早晩生により登熟日数を選択する。③積算気温を算出する。④積算日照時間を算出する。⑤主茎穂の上位3～4番目の2次枝梗が黄化度を確認する。とくに、本年は8月が極端な日照不足で経過しており、登熟の進み具合をよく観察して刈り取り適期を見極めて、高品質・良食味米の生産に当たることが肝要である。

コロナ禍の折り、講習会やほ場巡回は軒並み中止せざるを得なかった。営農指導員はきめ細かな肥培管理の指導も出来ず、作柄に不安を募らせていたが的中した格好となった。気になるのは今秋から本格デビューするサキホコレである。県ブランド推進室の技術情報によると、あきたこまちと同様の生育で、穂数少なく1穂粒数が多く総粒数は目標値を確保しており、大雨の被害は確認されておらず一先ずほっとしている。台風や秋雨前線などいかなる気象に遭遇しようとも、適期刈り取りに努め、品質の良い美味しい米の生産を心掛ける必要がある。大豊作とまではいなくても、平年作を期待してもう一踏ん張りして良い出来秋を迎えたいものである。

こだま

全国農業協同組合連合会 秋田県本部
〒010-8558
秋田市八橋南2-10-16
URL:<https://www.zennoh.or.jp/ak/>

次回の発行は10月15日頃

資料の使用に当たっては米穀部の許可を得る

JA全農あきた米穀部
〒011-0901
秋田市寺内字神屋敷295-53
TEL:018-845-8500
FAX:018-880-1572